



ソラとウミのアイダ®
～はじまりの物語～

※本作品の内容はすべてフィクションです。

実在の人物・団体・事件などには一切関係ありません。

ある日、海から魚が消えた。

世界中の海から魚が消えて、残ったのはクジラだけだった。

そこで水産省は、かねてより実験を繰り返していた、宇宙に巨大なイケスを作って魚を育てる計画「宇宙イケス」の試験運用をスタート。尾道おのみちには『尾道宇宙漁業団』が設立され、宇宙漁師が育成された。

そして近年、男女雇用機会均等法の強化によって、「漁師にも女性を」という声が高まり、6人の宇宙漁師女子候補生が第一期生として選ばれた。

これは、そんな彼女たちが、正式に候補生になる少し前の——『はじまりの物語』である。



プロローグ

Prologue

はッ、はッ、はッ……。

真つ白な息が、一生懸命走る少女の薄紅色うすべにいろの唇くちびるから漏もれていく。

生まれてから五年の間、ずっと伸ばしている長い黒髪がそんな彼女の背中で躍動やくどうする。

もうじき四月とはいっても、夜明け前の潮風はまだ冬の香かを残したままで、少女の上気した頬ほおを冷たく叩いていくが、いまの彼女にはそれすらも心地よかった。

時刻は午前四時少し過ぎ。尾道おのみちの町は暗く、まだ静かに眠っている——ただし、港に面したとある場所を除いて。

その一角だけはすでに煌々こうこうと明かりが灯り、人々の熱気にあふれていた。

四方の壁がなく、完全な吹き抜けになっている鉄筋コンクリートむき出しの大きな魚市場。そこに響くのは、数えきれないほどの漁船が立てるエンジン音、男たちのかけ声、ときおり混じる豪快な笑い声や、仲買人たちのセリの声だ。

どの船からも、真ガツオ、アイナメ、赤エビ、アコといった大小さまざまな魚たちが水揚げされ、氷のたっぷりつまった発泡スチロールの箱に入れられて、市場の床にずらりと並ぶ。もちろん箱に入りきららないような大物も置かれていて、それらはもう魚というより巨大な美術品のよう、ライトを浴びてピカピカと光っていた。

魚介類から立ち昇る潮の香りが市場中に満ちているが、生臭さなどみじんも感じられず、それらがいかに新鮮なのかを物語っている。

「すごい……」

人々の間を縫ぬってお目当ての漁船のそばにたどり着いた少女は、思わず嘆息たんそくしていた。船団の中でもひとときわ立派な船から、他とは比較にならないほどたくさんの魚が運び出されていく。

その様子を満足げに見守っていたのは、この尾道漁業組合を取り仕切る村上漁協長むらかみ——彼女が尊敬する祖父、その人だった。

「おはようございます、おじい様」

「ん？ おうおう、波乃なみのか。また俺の魚を見に来たんか」

鬼の漁協長——数多くの若い漁師たちを厳しく育ててきた老人は、そう呼ばれて恐れられていたが、鬼とは思えないほどの満面の笑みを浮かべて、可愛かわいい孫娘を抱き上げた。

「今日も、おじい様が一番の大漁ですね、きつと」

「もちろんだとも。漁で俺の右に出るモンはおらん」

波乃の祖父は得意げに、魚市場の中へと運ばれていく海の宝石たちを眺めた。

「ねえ、おじい様？ わたしも船に乗りたいです」

「んん？」

好々爺こうこうやは、波乃を抱き上げたまま少し首をかしげた。

「船なら、いつも乗せとるじゃないか」

「そうではなく……わたしも、おじい様と一緒に漁に出たいんです」

「ああ……はははは、波乃は漁師になりたいのか？」

「はい。とつても」

「そうかそうか、いい子だのお。元直もとなおの奴に見習わせたいもんだ」

「お父様？」

「……ああ」

それまでずっと破顔していた老人の表情が、曇る。

波乃の父親——すなわち、村上漁協長の一人息子は「漁師は絶対に嫌だ」と言って跡を継がなかった。いまは、広島市内の商社でサラリーマンをしている。

「……」

「あの、おじい様……」

急に顔が険しくなった祖父を見て不安になったのか、波乃は声を少しだけひそめた。

「おお、すまんすまん。しゃーなー、波乃はきつといい漁師になるでえ」

祖父は再び優しい顔に戻った。船団を持つ網元あみもととして漁師たちに畏怖いふされている老人も、孫娘だけは特別な存在のようだった。

しかし。

その後、少しだけ大人になった波乃は知ることになる。

漁師たちのゲン担かつぎのため、女が漁に出ることを許さない男たちがいるということ。

もちろん日本の海を見渡せば、女性漁師だって存在する。男たちを従え、漁協を仕切っている女性までいるくらいだ。ただし、彼女たちはみな、相当な苦勞を重ねてようやくその生なり業わいを手に入れていた。

けど、わたしだってきつと！

なんといつても人一倍負けん気の強い波乃である。どんな難行を強いられようと、必ず祖父の跡を継ぐという気概が、揺らぐことはなかった。

そう——あ、の、と、き、ま、で、は。

日本の海から……いや、世界中の海から、突如、魚が消えた。

それはまるで、悪夢のようだった。

二一世紀初頭、養蜂業者の命であるミツバチの謎の大量失踪が相次いだように……今度は、魚が一匹もいなくなってしまったのだ。

原因はまったくの不明で、誰にも手の打ちようがなかった。

毎日毎日、いくら海に網を投げ込んでも小魚の一匹もかからず……漁師たちは次々と廃業に追い込まれた。そして、とうとう波乃の尊敬する祖父までもが、漁をあきらめざるを得な

くなってしまったのである。

かくして。

尾道の町から漁業の灯は完全に失せ、子供の頃からの波乃の夢も潰えて……まるで波しぶきのように砕け散って、消えた。

第一章

Chapter.1

宇宙漁師女子候補生たちの朝



なぜ？ どうして？ 悔しい悔しい悔しい。

四月になったばかりのまだ淡い朝日が山の峰みねの向こうから完全に昇り、尾道おのみちの町を照らしはじめた午前六時。

尾道宇宙漁師育成センター女子寮の庭に戻ってきた村上波乃むらかみなみのは、宇宙漁の時に着用する特殊スーツに包まれた胸を激しく上下させながら、唇くちびるをかみしめていた。

——それは誰かに対してというより、自分自身へのいらだちだった。

いや、正確に言えば、波乃をいらだたせている元凶は彼女自身だけではなくて。

普段の彼女はもちろんこんなことは口にしないが……あえて名づけるなら『日米能天気コンビ』とでもいうべき二人組が、波乃の人生にとって大切な宇宙漁師候補生としてまだ残っていることが遠因になっていた。あんな、いつも不真面目で遊んでいるように見える二人が。しかも……。

波乃は、腕時計のストップウォッチのタイムを、もう一度見た。

一六分一八秒。

波乃がいくら必死に走っても一六分を切ることはできない。日米能天気コンビの二人は、今では一四分台の記録を出すこともあるというのに。

女子寮をスタートし、千光寺山頂行きせんこうじのロープウェイ近くを通り、アップダウンの激しい尾道の旧市街を抜けて市役所のある尾道水道沿いの道路に出る。そこから、新市街の周囲を

めぐる持久走コースをぐるりと一周。

普通の女子なら二〇分以上かかる距離だが、宇宙漁という過酷な生業なりわいに就くためにはそれでは心もとない。

そういう意味では、波乃の記録にしてもじゆうぶんに合格ではあるのだが、それでもやっぱり悔しくて……。

あの二人——空町春そらまちばるにしてもルビー・安曇あづみにしても、自分と比べて特段体格に恵まれているわけじゃない。でも、訓練を毎日続け、マラソンの走り方のコツを覚えていくうちに、いつの間にか波乃の記録を追い越すようになってしまった。

「……本当に情けない」
つい声に出して自分を叱責しつぜきする。

本来なら、いま走ってきたコースは、宇宙漁師を目指す前からの波乃のお気に入り、早朝の澄んだ空気の中、すがすがしい気分になれる場所ばかりだった。

尾道水道沿いの道路からは、市街地と向島むかいしまとの間を流れる豊かな水の流れが朝の光を受けてキラキラと輝いているのが見えるし、千光寺山ロープウェイを越えた先には、この町の歴史を感じることできる瓦屋根かわらやの家々と古い坂道と階段と、そして里山の雑木林によって細く入り組んだ路地が形作られていて、尾道独特の箱庭的な風情ふぜいを感じることができた。

また、その旧市街地から尾道水道を臨む眺望も素晴らしく、多くの写真家や画家、映画監

督などを魅了してきた。旅行誌によく掲載されているのも、たいていこのあたりの風景であることが多い。

まさに尾道の美しさの一端を垣間見ることのできるランニングコースと言えるのだが、今の波乃にはそれを楽しんでいる心の余裕すらなかった。

「あ、あのう？」

「……っ!？」

タイムのことばかりに夢中で、早朝の庭に他の誰かがいるとは思わなかった。

「す、す、すみませんっ。驚がすつもりでは……」

波乃と同じ特殊スーツに身を包んだ声の主がペコペコと何度も頭を下げた。濁点の多い秋田弁まじりの話し方のせいで、波乃はすぐにそれが誰だかわかって、

「ああ。櫻……ええと、舞湖さん」

「はい！ 名前、覚えでくれたんですね、嬉しい。できれば、みんなと同じように舞湖と呼んでください」

「わかったわ、舞湖」

「ありがとうございます」

舞湖は、もう一回、今度はペコンと深くお辞儀をした。

宇宙漁師志願者の中で一番おとなしく、内気で目立たない子だ。

しかも、体力と運動能力が致命的に欠けている。

彼女の知性や勤勉さ、常に努力を怠らないひたむきな姿勢は認めるが、おそらく力仕事には最も向いていないタイプだろう。

そんな彼女が、どうして宇宙漁師という職に就きたいのか、それはあずかり知らないことだけれど——少なくとも波乃は、舞湖が最終的に正式な漁師として尾道に残れるとはとても思えなかった。

もしも彼女にもっと運動能力があり、この内気すぎる性格さえなんとか直してくれれば、頼もしい仲間になっただろうに……と、それが残念でならない波乃である。

「あの？ もしよかったら、マラソン、一緒に、その……」

舞湖は特殊スーツの裾をモジモジといじりながら、上目遣いにこちらを見た。どうやら彼女も、波乃と同じように早朝の走り込みをしようと思っ
て起きてきたらしい。

「舞湖は感心ね」

「感心だなんて、そんな……あたし、みんなより体力がねえから、少しでも……と思っただけで」

「そういう心がけが大切よ。自主練のために早起きするなんて、わたしと真と真紀子さんだけだと思っ
ていたわ」

真というのは、京都の刀工師とうこうしの娘でフルネームを美剣真みつるまという。

波乃に負けず劣らずの生真面目な性格で、しかも気の強さも比肩ひけんしているが、そんな彼女が漁のパートナーになってくれればこれ以上ないくらい心強いことだろう。

一方、真紀子は熊本出身。脱落せずに残っている宇宙漁師候補生六名の中の最年長で、みんなから、頼れるお姉さんのように慕われている。

最年長とはいってもまだ十代なのだが、波乃たちとはどこか違う大人びた雰囲気と艶あでやかさのようなものがあって、漁協の男たちの間でも「女の漁師は認めねーが、マキマキちゃんなら許す」というわけのわからない隠れファンもいるらしい。ちなみにマキマキちゃんというのは、彼女のフルネーム、薪真紀子まきまきこから来ている愛称だ。

真紀子や真とは、いつもなら早朝の自主トレで顔を合わせることが多い。が、今朝ここにいないのはなぜだろう？

波乃がそう思っていると、舞湖はそれを察したらしく口を開いた。

「ええと……真紀子さんはお部屋で、昨日の講義の復習をしてました。微分積分って難しいですから」

確かに、つい最近まで現役高校生だった波乃や舞湖ならまだ学んだばかりの微積だが、すでに高校を卒業している真紀子にとっては、どちらも遠い昔に決別した憎き敵であるかのようなものだ。講義中もずっと「なんで、漁師と微分積分が関係あつと？ おかしゆうなかな？」と、熊本弁でブツブツ言っていた。

実際、漁自体には微積はまったく関係ないのだが……宇宙という危険な空間で漁をするにあたっては、とっさの思考力や計算力を必要とされることがあり、いちおうその適性を見るために、数学や物理の講義も行われていたりする。

「真は？」

「調理室にいました」

「ああ。今週の炊事当番だったわね」

宇宙漁では、海上の漁と同じく、何日も陸おかに戻ってこないことも多い。

そういうときは、一日三食、自分たちで作って食べなくてはならないわけで、この育成センターでも食事は全て当番制——持ち回りで炊事をする事になっていった。これもまた、漁師としての適性試験の一つだった。

「そうそう。あと、春ちゃんも起きでましたよ。さつき廊下ろうかでおはようの挨拶あいさつ、したです」

「なんですって!？」

波乃は目を丸くした。

あの春が……空町春が、こんな時間から起きている!？」

「ト、トイレか何かかしら？」

「違いますよ？ ちゃんとパジャマからジャージに着替えてましたし」

舞湖のその答えに、波乃はさらに目を丸くして、

「いったい何があったのっ？」

「いや、あの、そんなに驚がねでも……」

舞湖は不思議そうに首をかしげてみせたが、すぐに波乃の驚きの理由がわかったらしく、少しだけ苦笑した。

「春ちゃん、今週は炊事当番だから。真くんは無理やり起ごされだんでねえでしょうか？」

「ああ、なるほどそれで。……って、今週の当番、真と春なの!？」

波乃は、頭の中で炊事のローテーションを思い浮かべた。そして、確かに今週、美剣真と空町春が担当になっていることを確認し、頭を抱えそうになった。

「あの……お気持ちわかります。でも、そんなに心配しねぐでも、二人ともお料理はできるでねえですか？」

「料理自体は、ね」

だが、問題はそこではないのだ。

「ほら、ええ匂いもしてきた。今日はどんなメニューでしょうね？」

舞湖がつとめて明るく言った。

言われてみれば、確かに女子寮一階にある調理室から、ご飯を炊くた香りが漂ってきている。耳を澄ましてみれば、トントんと包丁を使う音も聞こえる。

そして、その直後。

何事もありませんようにと願う波乃の願いもむなしく、調理室のほうから女子二人のいがみ合う声が響いてきた。

「せやから、なんべんも言わさんといて下さい！ そないにしょっぱいミソなんか入れたらダメです！ 白じゃないと！」

これは間違いなく真の声だ。

「何言ってるの!? お味噌汁は赤ミソに決まってるでしょ！ おばあちゃんもそうやって作ってたもん！」

そして、それに向かって言い返しているのが春のようだ。

「それって、春さんの舌がにぶいからと違います!?」

「あー！ 真ってば、ひどいこと言った！」

「ホントのことやないですかー」

「むっかー！」

(……いやあの、だからね？ 子供の喧嘩けんかじゃないんだからね？ いい加減にしてほしいんだけどね?)

波乃は肩をがっくりと落とし、これから一週間もの間、調理中のみならず食事の間まで東西味対決——という名の子供の喧嘩——がはじまって、いつの間にか自分たちまで巻き込ま

れるハメになるのかと思ひ、げんなりした。

「え、ええっと……ちなみに秋田はさびい地域だんで、塩味の濃い赤ミソ、使うことが多いですね。波乃さんは、どっち派ですか？」

舞湖が、波乃に気を遣ってさかんにそんな話をしてくる。

「わたしはどちらでも構わないわ。料理に合わせて、ふさわしいほうを使うだけ」

波乃は一瞬ビクリとしたが、素知らぬ顔でサラリとそう答えた。

赤ミソと白ミソの区別くらいはつくが、どの料理にどっちが合うかなどさっぱりわからない。

漁師たちを束ねる漁協長の屋敷で生まれた波乃はこの町ではお嬢さまであり、食事の準備は家政婦さんがみんなやってくれていた。

そのため、炊事の手伝いをする機会なども特になく、普通の料理の仕方なんて、この育成センターに入る直前まで勉強したことはなかったりする。それまで彼女が作り方を知っていた料理といえ、昔、毎朝のように遊びに行っていた魚市場で漁師たちが作るものばかりだった。

売り物にならない魚の部位を大鍋で煮込んだ魚汁だとか、山盛りご飯の上につりにした魚を豪快に乗せ、しょうゆやマヨネーズなどをかけた荒々しい丼だとか——あまり女の子の料理というイメージのない食べ物ばかり。

